

---

# Attempt Suicide

貂寡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Attempt Suicide

### 【NZコード】

N1341D

### 【作者名】

貂寧

### 【あらすじ】

DAS、それが私たちの同好会。そしてありきたりの毎日が犯罪に巻き込まれていく…始めは暗い毎日も最後には…

## 1話 Decomposition（前書き）

グロイ類が、だめな人は気をつけてください。  
また、グロイのが大丈夫な人は、なんだこれくらいかと思つかもし  
れませんよ。けど、是非ぜひ読んでください

## 1話 Decomposition

夕焼けに染まる高校の教室で俺は、昔のことを思い出した。それは、小学4年生の頃だったと思つ。

俺は、運動するのが苦手でいつも図書室で、ミステリーやホラーの本を読みあさつていた。友達は、いなかつた。暗いところが好きだつたからなのか、よく男子には馬鹿にされ、女子には陰口をたたかれる、そういう生活を送つていた。

通学路の通り道に、白と黒の斑点模様の大きな犬を飼つている家があり、そこが唯一俺をいやしてくれる場所だつた。

よく犬を触つてはじゃれられて、そのうち校服は毛まみれになつていた。

ある日、いつものように犬とじゃれようとその家に寄つてみると、犬小屋はあるのに犬はいなかつた。散歩中なのかそう思いその日は、帰つた。しかし、次の日また次の日7日たつても逢えなかつた。

それから1週間たつた下校中のことだつた。溝の中に黒と赤と白の何かよくわからない塊が横たわつていた。

翌日もなんだかわからなかつた。しかし、うすうすは感ずいていた。

そして答えを出した。あの坂道の上の通学路に面している家の犬なのだと。そしてまたじっくりと眺めてみた。そして悲しくなつた。ハエが、たかつていのどつしてここに横たわつているのだろう車にでも轢かれたのだろうか。

涙が出てきたから走つて家に帰つた。

数日間、座り込んで溝の中を見て、そういうことを続けると心が  
どす黒くなり、そして見ても平気になつていつた。あまりに見過ぎ  
て少しの変化も逃さなかつた。

赤い部分の割合が多くなり、また新たな白い物が見えそして、それ  
とは違うまた別の小さな白い物が、うごめいてたりした。

しかし小学生の俺は、すぐに飽きが来るそしていつしか、その腐敗  
した犬の姿を見ることは、なくなつた。

そして今、この犬のことを思い出して笑つていられるような心にな  
つた俺は、血の色のように染まる空を眺めている。心の中のどす黒  
い底にいる変な生き物は、俺の体も蝕んできていた。

## 1話 Decomposition（後書き）

変な内容でごめんなさい。気を悪くしませんでしたか。もし、良かつたと思われる方がいらっしゃら是非次回も読んでください。

2話 Wrist Cut (前書き)

山鹿夜牙一見不真面目な女子高生ですが実は・・・

## 2話 Wrist Cut

私の席の前のやつは、騒がしい。

名前を教えようかと言われても知りたくない。友達は、作らない  
それが私の決まり事だ。

男子は、騒がしくて嫌いだ、女子は、いじめられたときに陰湿でき  
つい。

そうだ、いい季節なので図書室に行こうとしてもいつも図書室通  
いなのだが・・・春が暖かくって眠たくなる季節だ・・そしてお休  
み・・

そうして昼休みになつた。昼ご飯はすぐに食べ終え、ダッシュで図  
書室に行つた。図書室といつても体育館ぐらいの広さで棚には、も  
のすごい種類の本がひしめき合つていて、私が目標に走つていつて  
いるところは、奥のミステリーや、ホラーがあいてある棚だ。そこ  
で、いろいろと目にしていると昔のことも忘れてしまいそうになる。  
そういうえば、私の姉が自殺しかけたことがあつた。今ふと思い出し  
た。昔、まだ私が、小学生の時中学生の姉が手首を切つた。ぞぐに  
言つリストカットだ。それを私は、目にしてしまつたしかし私は、  
何が何だかわからずにただ血の流れしていくのを見ているだけだつた。  
母が帰つてきてようやく自分が何をしていたか気づいた。母が早く  
帰つたことで姉が死なずに済んだ事は、言つまでもない。

そうだ、今日はミステリージャなく、古い新聞記事の切り取りを見  
に行こうもしかしたらおもしろい事件が載つてゐるかも・・

その姉ももう二十歳に近いそして私は、もう高校生なのだ・・・

いつもいく棚の近くにいつもと違う感じの気配がする。棚のそばまで行って陰からのぞいてみる。するとどこかで見たことのあるような姿の女性がたつていた。そうか、わかつたぞ。

彼女に初めてあつたのは、中学2年の社会見学の時だつた。人体の不思議展を見に行つた。そして彼女にあつた。彼女は、人の血のサンプルを眺め、その後輪切りになつた人体、中絶された赤ん坊など、よくもまあ見る物だなと思いながら俺は、それらを見て笑つていた。しかし俺は、知つていた。彼女も俺と同じような部類なのだと、そしてその気持ちは、いつしか彼女を手に入れたいと思つていた。すらつと伸びた腕や、黒くて長い髪、深くすんでいる瞳そのどれもが俺のマイナスにならない物だつた。

そういううような昔をループするよつて見ていると不意にそばに誰かが立つていることに気づいた。

「何がそんなにおもしろいのかな」海神水途くん「そういうたのは、彼女だつた。うかつだつた、近くに彼女がいるなんてそして陰から見ていたことがもうばれている。彼女とは、一言も話したことがなかつた。同じクラスなのに・・・最悪だ・・。

「えつと・・何で俺の名前を・・?」変な質問をしてしまつた。

「えつだつて同じクラスじゃん。ごめんツイ話しかけちゃつて・・・私、山鹿夜牙さんがゆきで言つんだよ・・まあよろしく。海神くんも事件に興味があるのかな・・?」

「えつと、あるつて言えばあるし・・夜牙つて呼んでもいいですか?俺のことは、水途つて呼んでください・・。」あまりの緊張で敬語になつてしまつ。

そうして彼女との出合に終わりを告げるチャイムが鳴り響き  
「じゃあね。またいつか会いましょう・・。」そういう言葉を残

して彼女は立ち去つていった。またいつかって教室一緒になんですか  
ど・・・。そういう疑問が残りながらも次は、移動教室なので急いで図書室から出る。

今日は、いいことがあった。前々から気になっていた水途くんに話しかけることが出来た。なんだかうれしい。私と同じような部類なんだ・・と今でも感動が残っている。そうだ、今度会ったときは、じっくり話をしよう・・もしかしたら話が合つか。

そう思いながら午後の授業を聞いたりして睡魔が襲つてきて、眠りにつき

放課後になつた。部活動は、していない・・しかし、探偵部があつたら入る。

それだけ、推理小説などが好きなのだ。

そうだ、あの海神くんと2人で、学園探偵研究会を作つ。

そう思つたのは、夢だつたのか・・・。朝起きると部屋のベッドで朝日を浴びていた。

2話 Wrist Cut (後編)

本当に変な作品で「めんなれー」。

3話 DAS（前書き）

そして、私たちは、活動をするんだ。

そうして私たちは出合つた。図書室の何気ない昼休み・・・その棚は、奇妙な未解決事件のファイルの山だつた。

未解決の事件その響きは俺の興味を誘つ。今朝久しぶりに夜牙から話しかけられた。何か話があるらしい。昼休みにいつもの棚で待つているといきなり言われた。

今日は、朝から水途くんを呼び出してしまつた。彼には彼の都合があるんじゃないかな・・・

昼休みになつた。呼び出されたように、図書室へ行く

もう彼女は、待つていた。少し希望を見いだしている表情だつた。

「彼がきてくれた・・・絶対成功させてやる・・・！」

「きてくれてありがとう、水途くん。えっとね、話そつとしてたの

はえっと・・・

もし水途くんが、推理するのとか好きだったんだら2人で同好会を作つてみない?どうかな?」

「どうかなって言われても 同好会の顧問の先生とか決まっているのか・あとどんな活動をするんだ?」「う~

「えっと、顧問の先生は、まだ決まってないけどもう活動内容は、決まっているんだよ!えっとね、ここにある昔の未解決事件を再検討したり、身近で起きた事件を推理したりするって事でどうでしょう?」「う~

「まあ、いいだろ。明日まで待つてくれ、先生の件は、俺が決めてやる。田畠は、ついているからな。ネーミングは、夜牙に任せるから明日までに決めてこいよ。じゃあ、ばいばい」「う~

「うん。がんばって考えるよ。じゃあね、」

そう言つと水途は、すたすたと歩いていった。私は、もう少し図書室でゆっくりする事にしたまゝ、読みかけの本もあることだし。

明日が楽しみだ。夜牙がどんなネーミングを考えてくれるんだろうか

昨日は少しはしゃぎ過ぎてしまった。今日の昼休みは、とても楽しめた。水途が先生に話を付けてくれたのだろうか。私は、ちゃんと考えてきた・・・

もつ休みになる。今日の昼休みに話をする事になっている。先生には、話を付けた。許可は、出た。

そつして始まる俺たちの活動・・・

3話 DAS（後書き）

第3話です。

## 4話 Performance a ceremony (前書き)

同好会を作ることになった・・・・

海神水途と山鹿夜牙のお話（4話目）

## 4話 Perform a ceremony

そうして私たちは、活動することになった。

同好会の名前は、学園探偵研究会 Detective Academic Study 略して DAS  
そしてメンバーは、海神水途高校1年生（会長）と私、山鹿夜牙同じく1年

まだ一人だけだけどたぶんこれから増えるのかな？

そして同好会の顧問の先生は国語の卯月紅林先生

活動内容は、古いファイルの中から未解決の事件をとりだしては、自分の考えで再検討をする事だ。

許可は、出ている。私たちの学校は、2人会員がいるともう同好会として活動が出来る。

また10人集まると部活動の申請が出来る。

そうして私と水途は活動を開始した。

夕暮れ、僕は古い工場の倉庫のあとで、血まみれの壁を見つめていた。

あたりには肉片が散らばっている。どうしてこんな事をしてしまつ

たのだろう。

僕は、不安になりあたりを見渡す、誰もいないはずなのに不安になる。そうして僕は、走つて逃げた。片手には血に染まつたナイフを握っていた。

変な頭痛で目覚めた。ここ数日変な頭痛が続いて、寝不足状態だった。

どうして変な頭痛がするんだろう。気の迷いなのだろうか・・・  
そういうえば、とっても愉快な事件が載つていた。

ここ数日高校がある陽菜賀市内ひながで、3件の連續殺害事件が起こり警察は警備を強化している。

刃渡り15センチの鋭利な刃物で肉体を切り刻み被害者の遺留品も刻まれていたという。

3件とも市内だったが、犯行現場は違い高校から半径300メートルぐらいの円の中で起こつていた。

この事件を彼女は、知つているだろうか・・・。今日、D A Sで、聞いてみよう。これが最初の事件になりそうだ。

今日、朝にいきなり水途に呼び出された。今日の放課後D A Sに来るよつこと。  
いきなり言わされたのでびっくりした、まああの事件のことだろうが。

今日は、変な頭痛が続いていた。もう毎休みも過ぎて授業が終わりかけて、このにこつまで続くのだらう。  
彼女に会つときぐらには、血色の良い顔で居たいものだと思いながら授業は、聞かずに寝て過へる。  
もう夏になる。虫は、活発にはじり回つせいかね、うるさいよいつなく。

まあそれは、夏だと感じるから良いとしよう。  
しかし、なぜここまで暑苦しいのか理解ができない。  
教室は冷暖房完備のはずなのに全然効いていない。

そして待ちに待つた放課後になつた。水途に呼び出されたときせ、何かと思ったが・・・DASの活動ならば休みたくもない。  
DASの部室は、校舎の北にある部室棟の2回の一番西に位置していた。

隣には、SF研究会や、生物学部がいる。たまにその部員や会員の人たちに会つが口をきいたことはない。  
DASの部室のドアを開く。中には、もう水途が座つていた。  
急いできたはずなのに、何でこんなにも早いんだろう・・・。  
ふと、思つ。そしてもう一人顧問の先生が座つている。

ソファーが向かい合つておいてありその間には、少しこのテーブルが置いてあつた。

この部室は、元々誰も使っていなかつたので、先生が配慮してくださりソファーとテーブルを2つずつ置いてくれた。

もう一つのテーブルは、窓際に置いてある。

他の部室より少し広いので、後々色々と増えるかもしぬないが、今は、殺風景だ。

もうロADSを開いてから2ヶ月は過ぎてゐるはずなのに、まだ1回も同好会といった活動は、していなかつた。

夜牙が来た。そろそろ来る頃かと思つたがもう少し早く来てもらつたかった。卯月先生とは、話がもたづ息苦しかつたからな。  
「さあ、始めるとしよう。まず顧問の卯月先生だ、まあ山鹿もしつているだろうが。

そして今日集まつてもらつたのは、といつても3人しかいないんだが・・・まあいい。

「この数日この高校がある陽菜賀市内で立て続けに3件の連続殺害事件が起つてゐる。

凶器は、刃渡り15センチぐらいの鋭利な刃物で、被害者には、共通点が無いが・・・。

犯行現場が、この高校から半径300メートルの円の中で高校を中心にするようになつてゐる。」

そこまで言つて水途は、顧問の先生の方を見た。

先生はとこつと、毎晩でもあり眠たそうな顔をして話を聞いていた。

実に大変なことになつた。何で、よりによつてここの子たちがあの事件を探つてゐるのだろう。

顔には、出さずに。冷静を保とう……。

何か知つてゐるな・・・俺は、そう思った。

眠たそうな顔をしているが、普段の顔ではない絶対何か鍵を握つているはずだ。

「今日は、解散と言つことで、卯月先生は、職員室に帰られてけつひつりますよ

そういうと先生は、教室から出でていった。

一人になつた教室でこの事件の資料をまとめる。

そうして今日の活動が終わった。

実際に大変なことになってしまった。あの二人がこの事件を調査する  
なんて・・・  
そう思いながら僕は人肉をナイフで切り刻む

また事件が起こった、これでもう4件目だ  
もうすぐ終わるだろう、この事件の全容を夜牙に話そう

今日も水途に呼び出された。たぶんこの事件の全容が解ったんだろう  
うなー。

夕田が窓から差し込んでくる【ガラガラ】。そう音を立てて水途が入ってきた……。

夕焼け、その色はとても美しく何となく不思議になる……。  
そして、彼女に気付く。

「よお、山鹿もう来ていたのか……じゃあ、あの事件の内容を話すことにじょうづ……」

「まず、犯人は、この学校にいる……なぜかといつこの高校中心に起こっているからだ……。

次に犯人の目的は、何かの儀式だ……そこで、山鹿にお願いをしたいんだが……

こここの図書室で、この、星のマークを使う儀式を探しててくれ……。

「……」

そういうて彼は、私に魔法陣に使うよつな、変な形の星が、書いてある紙を渡した・・・  
星と言ひよりも・・・なんて言ひなんだろひつゝの正三角形が組み合  
わせてある図形に見える・・・。  
一様内容を理解し、この教室から出て行ひました・・・。

「わかつた。」

「ちょっと待て・・・もしかしたら、犯人に気付かれるかもしね  
いから・・・十分に気を付けろよ・・・」

「うん・・・・・・」

犯人は、誰なんだろう・・・

そう思いながら、私は図書室に行く

盗み聞きをするつもりはなかつたが聞いてしまつた・・・  
僕が犯人だと気付かれたら・・・彼らを放つておくことはできそつ  
にない・・・・・

山鹿は、歩いて駅に向かっていた。僕は、そのあとをついて行きチヤンスをねらう・・・・・。自動販売機の前で止まつたのでその時に声をかけ、車に乗せる・・・・・。

車の中の彼女は、ぐつたりと深い眠りについていた・・・・・。

俺は、今日山鹿が来ていることを知った・・・・・。  
しかし、何所にいるかは見当が付いていた・・・・・。  
そこは、たぶん卯月先生の家だろう・・・・・。  
山鹿から良いヒントをもらつた・・・・昨日の夜にメールが来たこと  
で・・・・・。

そこには、『謎の儀式は、図書室の例の棚にあるから・・・・・あと  
助けて！』と書いてあり・・・・・。

今朝一番に、俺たちが出合つたところに行くと、中国の歴史と邪法  
全集・・・・・。  
と言ひ本が置いてあつた・・・・俺は、それから先生の目的を知つた・  
・・・・・。

僕は、何かやるうとするのに誰かの邪魔が入ることを小さい頃から嫌っていた・・・・・  
そして今日、やつとの儀式を完成できるのだと想つとともにうれしい・・・・・  
しかし精神に異常があるわけではない・・・・・僕の中の興味を抑えきれなかつただけだ・・・・・

僕は、今・・・夜の高校のグラウンドにいる・・・・あたりは、しんつと静まりかえっている・・・・・遠くでカラスが鳴く声が聞こえたりもするがそれも闇に消えていく・・・・・  
光は、月しかない・・・・・

俺は、先生の行動を見守っていた・・・・・  
彼女が殺されるとなると・・・俺の理性がかき乱される・・・・・  
どうにかして彼女を俺の手元に置きたい・・・・・  
そして知り合いの刑事の親父に電話をかける・・・・・

「もしもしもし・・・・・俺だけ・・・・ちょっと高校に来てくれないか・  
・・・

今、連續殺人の犯人が第6番目の被害者を作りうとしているんだ  
が・・・・・」

「おー水途かーなるほどわかつた・・・・・サイレンは鳴らさずに静  
かに行くからな・・・・・」

「いや、鳴らしてきてくれた方がいい感じとしては都合が良いのだが・  
・・・・・3分で来てくれ・・・・・」

「わかつた・・・・すぐに行く・・・・・」

携帯を閉じる・・・・・

その時に、彼女が目を覚まして先生の腕の中で暴れ出した・・・・・  
しかし程なくして動きが止まる・・・・・  
ゆっくりと先生に近づく・・・・

「先生こんばんは・・・・・良い月夜ですね・・・・・それにしても、  
俺の夜牙に何をするつもりですか・・・・・  
殺すのだけは、許しませんよ・・・・・」

笑みを作つて言つ・・・・・

「殺す・・・・?海神くんなぜここにいるのですか・・・・・僕は、倒れていた彼女を助けただけですよ・・・・・何を言つてているのですか・・・・?」

先生も負けじと言ひ返す。

「先生、もうわかつてゐるんですよ・・・・・もうすぐ警察が駆け付けますが・・・・どうした物でしょ?・・・?」

「嘘を言つな・・・・・海神くん、もう遅いから還りなさい・・・・・僕は、彼女を家に送り届けます・・・・・」

「先生、耳悪いんですね・・・・・聞こえませんか・・・・遠くで警察のサイレンが鳴つてゐることを・・・・・」

「速く逃げた方が良いんじゃないですか・・・・・先生・・・・・それともおとなしく捕まりますか・・・・?」

私が目を覚ましたときには、もう先生の姿はなかつた・・・・・水途が言つには、先生は逃げ去つたらしい・・・・・だけど私は、知つていた・・・・水途のおなかにはナイフで刺された跡が残つてゐることを・・・・・

俺は、先生が俺をさして逃げる」ことをわかつて追いつめた・・・・・  
先生は、女なのにあれだけの力があることもわかつてはいた・・・・・  
その後の話なのだが・・・・・

先生は、中国系の日本人で、小さい頃からあまり友達はいなかつた  
ようだ・・・・・

今先生は、行方不明になつてゐる・・・・・  
同時に手配書も出でてゐるようだが・・・・・

親父には、「うひびくじ」かれた・・・・・ 病み上がりの体にまた  
深い傷ができた・・・・・

山鹿は、俺に感謝の意を込めて何かしてくれるだらうか・・・・・  
まあ、見返りは期待できないがな・・・・・  
今日も学校、明日も学校・・・・・ だけど、山鹿に会える毎日は楽しい  
日々だ・・・・・ それが見返り

私は、まだ謎が残つてゐる・・・・・  
水途が“俺の夜牙に何をするつもりですか・・・・”と言つていた  
よつな・・・・・  
意識が薄れゆく中で聞こえたようなきがした・・・

まだまだ謎が続いていく・・・。いつになつたら私と水途の溝は、  
ふさがるのか・・・??  
溝なんてあつたっけ・・・??

## 4話 Perform a ceremony(後書き)

まだまだ続ける予定ですが・・・  
どうぞ評価をしていって下さり・・・

5話

Purpura

b&amp;-go(前編)

またまたDASに、嵐のような事件が舞い込んできました・・・

ダダダダダ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

廊下をものすごい速さで走る

「早く早く急がなきや」

### 【ガラガラガラ】

「すみません海神くんいますか??？」

俺は、のんびりと夜牙が入れてくれた紅茶をすすつていた  
いきなり開いたドアに夜牙が猫を齧かしたように目を丸くしている  
それが、けつこう笑いのツボだった

「ふつふつ・ふふふ・あはは」

「何笑つてるのよ!!!!」

夜牙が顔を赤くして恥ずかしそうに言いつ

「だつてその顔・・・見物だよ」

静かさが漂つ

「すまんすまんで奈賀さんびつしたんですね」  
なが

「あのーー探偵ですよね」

「ええ、一応は」

「だつたら、私の幼なじみを助けてください」

「どうしてですか？？」

「だつて今頃行動がおかしいんです・・・  
学校には来ないし・・・家に行つてもあつてくれないし」

私は、彼女を知っていた  
この学校で知らない人は、恋愛に興味のない男子だけだつと言つ

ほどのお

そう・・・

その名もすばり奈賀努那なかゆめな

恋愛の話で、この方のお名前が出たらピカイチと言ひほどの人だ  
だけど、今見ているとなんだか様子がおかしい

「奈賀さん何で幼なじみのことを見こするんですか？？」

「だつて、彼は私の彼氏なんだもん」

私は、入れてきた紅茶をこぼしそうになつた  
奈賀さんに、彼氏がいるとは噂で聞いていたんだけど  
その彼が引きこもりだつたなんて初耳だ

だけどなぜ、彼氏は、引きこもりになつてしまつたのだろうか

「奈賀さん、彼とはいつから会えなくなつたんですか??」

「えつと、夏休みあけてから」

「理由は、もうひんわりませんね」

「はい・・・」

「やうですか、引き受けでみましよう

調査料は、あなたと彼が仲良くなつたあとでいただきまゆ

調査料をとることを、私は知らなかつたつて、ボランティアじゃなかつたの?????

彼女が出て行つてから水途に聞く

「D A Sって、ボランティアじゃなかつたの? もしかして事件の時だけ??」

「やうやあつそつそづ、」の前の事件でおまえを助けたけど……  
その時の見返りをまだもらっていないんだけどな  
もう一回あの顔をするのと、俺にキスするのどっちが良い?????」

そういうと俺は、夜牙の方を向いた……

「何言つてんの…………どっちもいやキスとか以ての外…………」

夜牙は、顔を真っ赤にしてすゞしく恥ずかしそうだった  
俺は、それを見てまた笑う

水途の笑うところ久しぶりに見たな  
キスしちゃっても良いんだけどしたらお別れみたいに思えるからや  
なんだよな  
まあいいや

「キスして欲しい?????」

「えつ、そんなこと言われてもなー、ノリだからノリ」

ちょっと落ち込んだ

キスして欲しいって言うんだつたらしても良かつたのに……

まあ、良いけど

俺は、びっくりした夜牙が俺なんかにキスしてくれないだろう  
その油断が甘かった、して欲しい？？って聞かれると

俺の理性が理性が・・・

「また今度な」

その言葉の意味は、私に伝わってきた  
また今度それは、いつなんだろ？？？

「で、事件に戻るが。奈賀の幼なじみけん彼氏の尤杵戒（ゆうぎかい）に、何かがあつたかもしれない

そこで、山鹿、彼の身辺調査を頼む」

「わかつた！身辺調査」

「くれぐれも前の事件のように自分の身の安全を怠らないよ！」

「うん。じゃあ、何かわかつたらメールを入れるから」

そういうと夜牙は、教室を出て行つた  
俺は、心配だつた  
また彼女がさらわれることがあつたら  
犯人を殺しかねない・・・・・

まず、クラスのみんなに聞いてみよ

月に2回ほど病院に行って薬をもらいつ  
何もする気が起きなくて  
学校に行つたら笑いものだ

私は、彼の身辺調査を行つた

近所の人によると彼は、月に2回顔を隠すような服装でどこかに行  
つているらしい

決まって15日と30日時間は、午後2時・・・

今日は、14日明日の午後に彼が出てくるところのだった

メールが来た、えつと

明日の午後2時に彼が家から出るらしい(「近所の人によると」)  
月に2回15日と30日にだそだ

だから明日、私は、彼の追跡をしたいんだが、良いでしょうか

返信、

いいよ。そこは、任せる・・・  
自分の身は、ちゃんと守るんだぞ

電車に乗って、降りたところへ8分ぐらいのところにある馬路田

翌日の1時、

彼が部屋から出でてくるのに少し時間がある

俺は、心配だった。彼女が危ない目に遭つていたりじつとか  
どうじん不安になる

### 【ガチャ】

ドアの開く音と同時に彼が出てきた  
黒い服で身を包みマフラーで顔を隠して  
そのまま駅の方へと歩き出した  
私も跡をつけろ・・・

駅だった

けつこう人通りが激しく見失わないようにする

そして着いたところは、駅から5分歩いたところにある病院だった

彼は、その中の内科に歩いていく

何かの病気なのだろうか

遠くから見て「肩を誰かがたたいた

「ウワツ……！」

振り返つて確認する

「おまえ何かの病気なのか？？？」

そこには、ものすごい勢いで笑っている水途がいた

「何でここにいるのよ……！」

「何でかつてそりゃ一決まつていいだろ  
跡をつけってきたのさ」

「誰の？？」

「おまえの……ふつ」

また笑い出した

そつこうじていううちにターゲットは  
診察室の中に入つていった

「何で、あと着いてきてるんですか」

彼女の顔がどんどん赤くなつていく

「探偵だからさ！！」

「意味わからんし」

「で、どうなんだ、尤杵の様子は」

「そんなに不審なことはないです  
何かの病気なのでしょうか？」

「そうだらうね

たぶん血液の病気だらう

それか皮膚・・・」

「何でそんなことわかるんですか」

「まあ本人に聞いてみた方が早いよ」

そういうと診察室から出てきた尤杵に声をかける

「よう

尤杵元気だつたか？？

ずいぶんと学校に来てないけど何か病気にでもかかつたのかい？？

それとも恋の病かな？？そうそう、ガールフレンドが心配してい

たよ

「よお、海神じやねーかー久しぶりだな、ちょっと駅ありで病院が  
よこや・・・」

「そのわけは、顔にあるのかい？？」

「ほおー…そこまで見切つっていたのか…！」

「やつぱす”こなDASを作るほどあるじやんか」

セツコと尤杵は、顔に巻いていたマフラーをはずした

「どうしたんだその顔は！…！」

大げさにそういうのは、水途だった

「ちょっとな、血管性紫斑病にかかってしまったね  
そのおかげで病院通いで…・・・学校には、恥ずかしくていけない  
し」

「そうだったのか、病院で薬をもらっているんだな」

「わう、抗アレルギー剤をね。だけど、なかなか直らないし腹痛も  
起ころうとして、

学校に行けないし…と言つても恥ずかしくってな、この頬が

そうだったのだ・

彼は、紫斑病を患い、彼女に見せたくないあまりに学校も行かず部屋に引きこもっていたのだった・・・どうしたら彼女に会わせることができるのだろうか彼女が、この顔を受け入れてくれるとき早いのだが

「尤杵、彼女に会いたくないか」

そう言つたのは、水途だった

「そりゃー会いたいけど、こんな顔じゃなー」

「俺から、彼女に言つても良いか？事実を」

「そりゃー探偵さんの報告だもの文句はいわねーが、僕にも考えがある・・・もし彼女が僕の顔を気にしないって、言つてくれるんだったら、それなりの見返りをおまえに渡すよ」

「良し解つた、それジャ一また学校で会おうな」

そういうと水途は私の手を引っ張つて病院から出て行つた  
いきなり引っ張られた私は、こけそうになつた、危ない危ない・・・

それから2日後

水途が、何かを一生懸命になつて調べていた

そこには、家庭の医学全集、薬の飲み方、薬の種類、病気の予防等々、様々な医学にかんする本が積み上げられていた  
そこまでして見返りが欲しいものなのだろうか

「私、奈賀さんと話していく。」「まあ、女の子同士の絆に頼るしか  
ないから」

「ねえ。じゃあ期待して待つわよ」

今は、昼休み。

私は、奈賀さんを一生懸命に探した  
中庭の藤の木のしたにいた

「奈賀さん、奈賀さん」

「こちちは、三鹿わん」

「今時間良いですか？調査の報告にきました」

「はあ。あの、だいたいは、水途わんに聞きましたけど」

「そうですか。その、一つお聞きしたいんですが  
彼とつきあい始めたときに、顔で判断しましたが、それとも性格

で？」

私は、意味不明なことを聞いてしまった  
人間誰しも顔で人を選ぶことはないのに

「うふ。面白い方ですね、そうですね。顔で選んだのではあります  
ん、

ましてや性格が悪かつたらつきあいませんよ。だからあの戒の優  
しさに心打たれたんです・・・」

「だったら、彼と会つてもうえませんか？もつ一度、好きになつて  
あげてくれませんか？」

「元々大好きですよ。彼がどんな顔になるかとも・・・  
だから、是非彼と逢わせて下さい」

「はい。では、また連絡します」

そういうと私は、猛ダッシュでDADSの部屋に向かった

【ガラガラガラ】

俺が本に目を落としているときに誰かが行きよ／＼ドアを開けた  
そのおかげで、積み重なった本が一気に崩れた

「どうしたんだい？ そんなにいそいで、山鹿」

振り返ると息が上がって今にも倒れそうな山鹿がいた

「・・・奈賀さん・・・尤杵くん・・・逢いたいそうです」

とぎれとぎれに言ひ彼女を見て笑つた

「そつかいそおかい・・・じゃあ、尤杵には俺が連絡しとくよ  
明日の放課後にここで待ち合わせつて事で」

私は、奈賀さんにそのことを言つた

彼女は、とてもうれしそうに笑つていた

俺は、尤杵に報告をした

明日は、久しぶりに学校に来るらしい

そして放課後

DASの部室には、私と水途がいた  
まだ一人とも来ていない

10分後・・・廊下に2つの足音が響く

【ガラガラガラ】

ドアが開いたそこには、  
仲が戻った

1組のカツプルがいた

「海神くん、山鹿さん。そしてDASみんなありがとう

仲が戻ったことは、私にとってうれしかった

だけど・・・いつの間に仲が戻ったのか??

水途が言うには、それは尤杵と奈賀だけの秘密らしい

調査料はといづと、たいしたものではなく  
また、あのカッフルがD A Sに遊びに来る」という

そうして、私と水途の仲も深まってきたよつに見える2回目の春が  
来た

\* \* 深まっているかは、不確かです・・・・\*

## 5話 Purpura b&amp;-go (後書き)

紫斑病とは、皮膚に赤紫色の出血斑が出る病気です・・・  
5話田を読んでくださいがとつづります。  
是非評価や感想をおしえてください・・・

## 6話 Rivers of Blood(前編)

第6話です . . .  
季節は夏 . . .

## 6話 Rivers of Blood

1年ぶりに静かだった町が騒がしくなり始めた  
警察がせわしなくパトロールをしている

ナイフは、肉を切り裂くためにそして、赤く染まるために存在している

血は、面白い・・・なぜ血液の中には、白血球や赤血球があるので

何所で血液は生まれ、何所で死ぬのか  
そしてなぜ、すぐに固まってしまうのだろうか

血は、面白い  
世界が血で染まってしまえばどんなに面白いことだろうか

今僕の前には、肉片が散らばっている

ここは、何所だろう・・・何かに夢中になるといつも解らなくなる

今朝、新聞で面白い記事がないかと探していると

今頃騒がしい警察が追っている事件が載っていた

本日、正午市内にある造船所跡地で、遺体が発見された  
被害者は、遺留品により市内に住むと思われる高校生

遺体は、鋭利な刃物で切り裂かれていたといつ

この事件を彼女は知っているだろうか

俺は、心の底の闇ではこの事件に関わりたいと言っているが

俺の理性は、それを許さない

どうしたら良いのだろう

今回は、行動を観察するだけにしたほうがよいのか

今朝、朝刊を見たら

なんだか水途が首をつつこみそつな  
怪事件が載っていた

鋭利な刃物で切り刻まれた遺体・・・

まるで、1年前の卯月先生の事件のようだ

そうだ、今回も水途はこの事件に首をつつこむだらうから  
私も、頑張って手伝おうー！

そう思つて家を出る

## 放課後

水途から呼び出しを受けた。毎回の事ながら突発的に来る呼び出し  
そして待っているのは、いつも事件のことだった

夕焼けが、去年よりも美しい。暑苦しい夏の夕暮れだが  
もうすぐ彼女が入ってくるだろう

廊下で音を立てずに歩いてみた

なかなか難しくって、少しの衝撃でたくさんの音が出て響いていく

【ガラガラガラ】  
ドアを開ける

「よお来たな」

「ヤツホーで、あの事件のことかな？？」

「そお、よくわかつたな。で、そのことなんだけどな・・・  
今回は、観察だけをしておくことにする  
関わらない。前の事件のように身に危険が及ぶといけないからな。  
・」

「えつ・・・」

そう、私はとまどつた  
活動する気満々だったのに、それを見事に裏切られてしまつた

「わかつた」

「じゃあ、そういうことで」

そういうつて彼は、出て行つた

私覚悟を決めてたのに、もう・・・

一人になつた教室で夕焼けに染まる空を眺めて落ち込んだ

俺は、彼女に悪いことをしてしまつたのだろうか  
なんというのだろう

胸の奥の方が何かに締め付けられるように痛い  
こんな経験を今までしたことがなかつた  
なぜこうなるのだろう

暗い闇を心に宿したのでは、無かつたのか  
なぜ彼女と一緒にいると、こんな心でいるのだろう  
どうして、夜牙なんだ

私は、水途といふと心を閉ざしたはずなのに  
いつの間にか明るく振る舞ってしまう

何でだろう・・・

こういう経験は、姉が死にかけて以来1回もしていない  
どうしてだろう

僕は、血に染まつたナイフを握りしめて  
肉を切り刻んでいる

こんな時どういう顔をして切り刻んでいるのだろう  
笑っているのだろうか、泣いているのだろうか  
解らない、解らないんだ

僕は、ふつうの高校生なのに

何で高校生を刺して刻んでいるのかも解らない

どうして・・・どうしてなんだ  
どうして僕なんだ  
ねえ、教えろよ

水途が事件を見ている間にもう何件同じような事件が起つたのだ  
るつ

被害者が増えていくのに  
水途は、動こうとしない  
どうしてなんだろう・・・  
どうしてなんだろう・・・

警察に任せても解決しない」とぐらい知っているはずなのに・・・

ケータイを取り出した

「よお、親父。体調崩してないか

「よお、最近忙しくってな・・・知ってるだろ?」

「おお、どうしたんだすすみ具合は？」んな事聞くまでも無いんだが・・・

「秘密だ！秘密。警察は、秘密主義なんだよ・・・」

「やつぱやつか。進んでなこと見た」

「やつわ・・・あとは秘密だ」

「ふうん。で、今回解決しそうなのか」

「いや、手詰まりだな」

「手伝って欲しいか？？」

「いや、けっこいい。後々めんどくさいからな  
上からな、ひっぱたかれるし、下からは、塗りつけられるし  
ホントこの一年苦痛だったよ」

「そつか。じゃあ、愚痴聞くためにかけたんじゃないしな・・・」

そしていきなり切る

まだ向こうではがみがみ言っていたが気にしない  
どうせ事件に首をつっこむなどかだらう

それと同時に着信音が鳴る

親父からだつたら着信拒否をしてやるとこが

夜牙だつた

「もしもし」

「あのつづさんあつ?」

「どうした?」

「今どうしているでしょ?」

「じひねーよそんな」と

「・・・た」

「た?」

「・・・・た」

「す・・・

「け・・・

「け?」

「これまで語つとむつ内容は解つた

たすけて

夜牙に危険が迫つてゐる

「こまどりだ」

そう聞く前に切られた

私は、水途を奮い立たせたかった  
なんだか今頃元気がなかつたし

あと耳寄り情報で1年前にあつた警察のおじさんから  
“今日は、水途の誕生日だからな”と連絡が入つて

わざわざ、ケーキを買ってサプライズ

自分が危ないと言つたら家から飛び出すだらうと想つて・・

俺は、焦った

一刻も早く彼女の元に行かないとあの犯人に殺されてしまう

早く早く

扉を生きよいよくあける

【ドン？？】

何かにぶち当たつたような音が聞こえて

ドアの裏をのぞいてみる

そこには、ケーキの箱を持つて目を回した夜牙がいた

思わず出してしまつ動搖した声・・・

「えつ？？」

ドアが生きよいよくあいたと想つたら  
立ち位置が悪くて、ゴンツ・・

そのあとの記憶がない

いつの間にか部屋の中・・

ソファーの上で寝かされていて頭には濡れたタオルが  
ここは、何所だろう

「おっ、田え覚めたか。大丈夫だつたか？」

この声を聞いて・・内容を理解して、顔がどんどん赤くなつていく  
そう、ここは、水途の家  
そして、その家の中のソファー

恥ずかしい・・玄関の前で倒れて、そのあとどうしたんだう  
運び込まれた??重くなかったのかな・・

「おい。だいじょ「ぶか??」

「うん・・・」

「ごめんな。サプライズとは想わなかつた・・・ホントごめんな・・

「ケーキ」

「もううつ。今日は、俺の誕生日だつたんだな、ごめんな

「いいよ」

まだ私は、ソファーに寝ていた  
なんだか言いたいことがありすぎて、何から言わないといけないか  
解らない

「あのね・・・」  
体を起して泣いて。だけど、まつげに涙が垂れる

彼女が泣き出した。どうしたら良いんだか・・・  
今まで、自分の家に友達を連れ込んだことのない俺はとまどい・・・

「どうした? そんなに痛いのか」

「ううん。そうじゃなくって  
水途、私のことにして事件解決したいのに我慢してるのでしょ  
「何でそんなことを・・・」

「だつて卯月先生の時も、同じ感じだったんだもん。」

「やうかな

「あとね、私・・・水途の側にいると明るく振る舞えたりできる」

「今まで泣いて、また涙があふれ出した

俺は、それを見ているとこれ以上泣かせたくない  
どうしたら良いんだと、心の奥で想う

「俺もなんだ、小さい頃色々とあってね  
心の奥の方にどす黒いものが居たんだけど・・・  
夜牙と出会いつて以来、なんだかそれがどんどん薄くなってきたよ  
うな気がするんだ」

「やうだつたんだ。あのさー私の身の危険とかは大丈夫だから!  
水途のやりたいことやれば?」

その言葉を聞いて、俺の肩から荷が下りたように全身の力が抜けた

「夜牙、ありがとう」

そうじつて、彼女を抱きしめる  
彼女の顔は見えないが

今の俺の顔は、誰にも見せられない

「いいよ。水途が居るから今の私が居る・・・」

程なくして

「さあ、ケーキ食べよ。もう一つオだしな」

お皿とフォークを持ってくる

誕生日、いつから忘れていたのだらう・・・

そのケーキは、とびっきり甘くて、とってもおいしかった・・・  
買ってきて良かった

1つここに来るときに決めたことがある  
水途への誕生日プレゼント

「「」の前、水途見返りが欲しいって言つていたよね？」

「やうだけど」

「じゃあ、私からの見返り＆誕生日プレゼント」

そうこうと、彼女は俺の唇に自分の唇をつけた

私にとって、初めてのキスだった  
なんだかケーキのおかげもあって  
甘いファーストキスだった  
水途は、何回目なんだろう

俺は、目を丸くした  
彼女が、あの夜牙が

・・・俺なんかにキスしてくれるとは  
夢にも思っていないことだった  
しかも、俺にとつて初めてのキス

「これが誕生日プレゼントかー、じゃあ、お返し

そうじつて、俺は、夜牙の唇に自分の唇をつける  
本日2回目。やっぱり甘いキスだった

「『めん。氣イ悪くした??』

「全然、ありがとうお返し」

「で、事件のことなんやけど。やっぱ首つっこんだ方が良いと思  
うかい?」

「うん。私のことは、大丈夫だから」

「やうか、では、いつちゅやるか・・・」

僕は、ある女の子に目をつけました

今時、とっても見かけないような黒くて長い髪の毛の少女です

彼女を切り刻んでみたい

そう、僕の本体に言いました

僕の本体は、もう拒絶は、しません

しかし、これが最後だと言っています

もう12人殺したから良いだろう・・・

僕は、そう思い許可を出します

僕は、自分の中のもう一つの人格によって今支配されている  
刃向かうことは、できない・・・  
そうして最後になるであろう  
彼女に目をつけた

俺は、事件の共通点を洗い出した

まず、どの被害者も俺たちが通っているこの高校の生徒たちであった  
1・2年のクラスからの出方が多く計1・2名の被害者が出ている  
性別は、女子の方に少し偏ってはいるもののほぼ僅差はなし  
もう少し情報が豊かであつたら犯人は、間違いなく見つかるだろうが  
なかなかそもそも行かない

今解っているこの情報から

犯人は、俺たちと同じ学年の中にはいる可能性が高い  
そうすると夜牙が危ない  
そうでもない、目をつけられやすい体質をしているのだからな  
そういうことで夜牙のマークをしてみることにする

今日の彼女は、とっても幸せそうだが  
何か良いことでもあつたのだろうか  
校門で待っていると近づいて来た  
その時を見計らって、僕が誘う

「ちょっと話があるんだけど・・・良いかな」

彼女は、誘いにのつて僕の横を歩く

俺はちょっと嫉妬した  
まあ誰しも嫉妬はしてみるものだ  
夜牙を校門で待つていたのは  
同じクラスの彼我佑  
けつこうもてている奴だ  
跡をつけてみる

僕たちは、徒歩5分ほどのところにある、古い病院のあとに来た  
彼女を気絶させる  
そして病院の中に運び込んだ

俺は、その光景を見て犯人が彼我だと知った  
そして親父に連絡する  
サイレンは、鳴らさずに、病院を包囲してくれと  
そして中に乗り込む

中は、薄暗く見通しが悪い  
どこに行つたのか解らない  
まず手始めに診察室の方から見ていく  
2階に行くことはないだろう  
逃げにくいからな

僕は、最後の獲物に彼女を選んだ  
あと5分もしたら目が覚めるだろう

その時に少しづつ痛めつける

俺は、焦っていた

早くしないと彼女が殺されてしまう

診察室を見終えた俺は、奥の方の手術室を見る  
3つありそのうちの一つに手術中のランプがともっておりそこには  
るのだと解った

犯人が誘い出しているのかも知れない

僕は、無意識のうちに手術中のランプをつけていた  
なぜか解らないが、もう一つの人格がそうしたのであろう  
彼女が目を覚ますまでもう少しはあるが  
その前に邪魔者が来た

俺は、手術室のドアを開ける

そこには、彼我と台の上に寝かされた夜牙がいた

俺は、その光景を見て理性が抑えられなくなり始めていた

「なにしてんだ。」「んなどうで」

怒りを押さえながら言う

「解剖実験・・・」

彼我は、無表情な顔で答える

「どうしてそんなことをするんだ」

「僕の中のもう一つの人格がやれという」

「もう一つの人格をだしてくれないか」

「僕だけど何か」

口調が明らかに変わり顔の表情も豊かになる  
「おまえは、誰だ」

「僕？？僕は、彼我佑だけど何か問題でも」

「なぜ夜牙を最後に選んだ」

「内緒・・・教えてあげても良いけどやっぱり殺してからじゃない

「

「どうして田舎で殺すんだ」

「それも、内緒」

「夜牙を返してくれないか

「こやだ・・・今日幸せそうだったのはあなたのおかげですね」

「だから夜牙を返せ

俺の心の中にあるような液状のものが沸々と沸騰し始めた・・・

「こやだ

「返せと言つてこらんだ――――――」

「何で?・?山鹿さんは誰の物でもないでじょ?」

その時、夜牙の意識が戻った

『う・う・頭いたい

しかし、夜牙の意識はまた彼我がどばした  
俺と決着をつけるらしい

「夜牙は、俺の物だ。誰にも渡さない、俺の物なんだ」

私は、意識が薄れゆく中水途の声を聞いた

「水途・・・」

「仕方ない」

そういうと彼我は刃渡り15センチほどのナイフをだしてきました  
しかし、それを振り下ろす前に

地面に倒れた

俺は、無意識のうちに彼我の太ももを刺していた  
あたりには、その時噴き出した血液が  
何かの模様のようにしつかりと付いていた・・・

ケータイを取り出す

「親父。すまん、入つて来ていいぞ・・・  
この事件は、解決した。あと救急車も呼んでくれ・・・  
じゃあ、またいつかな」

せつこつて裏口から

そつと出て行く

腕の中の夜牙はすやすやと寝息を立てていた

その後

彼我は、捕まつてすべてを自供した

俺は、また親父にこいつひどくしかられた

夜牙はと言つと

事件のあと5分ぐらいで目を覚まして  
また猫のように目を丸くしていた

俺が、もう少し早く決心をつければ  
12人の被害者を作らずにすんだ物だ

夕暮れが夏を飾りながら  
過ぎていく  
今日この日の感謝とともに

## 6話 Rivers of Blood(後編)

第6話でした・・・  
どうも読んでいただきありがとうございました・・・  
次話も是非読んでください・・・

## 7話 Hair&Hunt

僕が、初めて彼女の長く美しい黒髪を触ったのは中学の時だったと思う。

それが初恋というのかは、確実にはイエスといえないがただ彼女の髪の毛が好きだった。

高校生になつた僕の手には今でも彼女の髪が流れしていく感触が残っている。

さらさらと、手の上から落ちていく感触それはとても魅力的だった。あの髪の毛を手に入れたい。毎日触つてみたい。

そう思いだしたのは中学を卒業して彼女と別々の高校に行つた頃だった。

ああ、あの黒髪が懐かしい。手に入れたい。

そして僕は計画を立てた。

俺が夜牙の髪を触る。彼女は、少し恥ずかしそうに笑っていた。今、掌の上から彼女の髪の毛がこぼれ落ちる。

さらさらしたとても綺麗な髪だ。

D A Sは、現在暇と言つても良いほど事件が起こらず平和だ。

時々猫探しの依頼や、無くし物の依頼が来るがすぐに解決してしまう。

だから今俺たちはクイズを出し合つている。

夜牙が問題を出す。

「水途、問題。上は大水、下は大火事さて何だ！－！」

そんなのは簡単である。

「それは、お風呂だろ！－！」

彼女は笑つている。

「そう当たり！…じゃあ、次ね。

灯油をアスファルトにまきました。そこに火を付けたマッチを落とすとどうなるでしょう。」

これも簡単である。

「簡単簡単、それは付かないのが正解さ。」

「何で解ったの？」「彼女はにこにこしている。

「だつて付かないだろう。」

「理由なしかい！！まあいいけど。」彼女の笑みは太陽より明るいだろう。

「さあ、帰ろうか。もうすぐチャイムが鳴るだろうから。」

彼女は、てくてくと付いてくる。

力モの親になつた気分だ。

僕が考えた作戦は、まず彼女をおびき出す。

噂によれば彼女はDASと言う同好会に所属しているらしい。

だから少しややこしい事件でおびき出す。

頭が切れる会長がいるという情報もあることだから僕のライバルです。

さあ作戦は、とても簡単。

だけど結構複雑です。

まず通りすがりの髪が長すぎると思う人の髪を切つてあげます。

それを毎日一人ずつ郵便で高校のDASに送りつけます。

その繰り返し。

そして調査に出てきた山鹿さんの髪の毛をかつて終わり。

こんなのでよいでしょう。

郵便の消印を色々なところで押してもうつてどこから出したのかは、解らなくした方の勝ちです。

計画実行の日は明後日。

それまで準備をします。

まず、切れ味の良いハサミとナイフ。

そして髪の毛を入れる封筒、糊と手袋あと切手を何枚分いるだろ？  
うーん80円切手を20枚ぐらいあつたらしいのかな？  
出費がきついけど彼女の髪の毛をもらつためだ！！と僕は覚悟を決めます。

私は、今日水途に触られた髪の感触を思いだした。

昔、中学の頃心を塞いでいた私はある男の子に髪を触られました。  
確か名前は、涼風波すずかぜなみ。

名前は女の子みたいだっただけど本当に女の子みたいな顔立ちの男子  
だった。

ああ、あのころは結構きつかつたなーと思いだす。  
イジメがひどくてたまらない毎日だった。  
少し気分がブルーになつて来る。

翌日、彼女はなんだか元気がなかつた。

「おい、夜牙大丈夫か？調子が悪いんじゃないかな？」

「ううん？大丈夫。ただちょっと昔のことを思いだして。」

彼女の笑顔がだんだんと無くなつていいくことに俺は戸惑つた。  
なんだか嫌な予感がした。

「今日は、本当に元気がないな。」

そう言つと彼女はやつと笑つて悩みを打ち明けた。  
「昨日、私の髪をいらつたでしょ。」

それでね、ちょっと昔のことを思いだしたのよ。

中学生の時虐められていたんだ。

その時私の髪をいらっしゃからかった男子がいてその子の事思いだしていたの。」

彼女は、懐かしい思い出のように話した。

そう言ひ思い出があつたなんて知らなかつた俺は少し悲しくなつた。彼女の黒い髪はとても綺麗で、白い肌とは対照的だつた。

さあ、準備は整いました。

明日実行に移すときです。少しナイフを握つてみます。  
良い切れ味なので嬉しくなり、そして楽しみになります。  
ああ、早く彼女の髪をいただきたいです。

俺は、どうして良いのかわからなかつた。

彼女の髪はとても綺麗で美しいのに彼女は嬉しそうにしなかつた。  
昔の思い出に浸つている彼女はなんだか瞳の色が薄れていた。  
本当にどうしたらよいのだろう。

「おい、夜牙だいじょうぶか？」

今日一人目の髪を刈りました。

この髪は彼女のように長かつたのですが、とても汚かつたです。  
もっと、彼女の髪は綺麗で誰にも触れさせていなかつたです。  
早く彼女の髪が欲しいと僕は思います。  
その汚い髪を今封筒に詰めています。

送り先はD A Sです。消印は、はじめとこうじもあり近くのポス

トから入れました。

さあ、明日は、どこから入れましょうか。

D A S に、封筒が届いた。

夜牙が中身を確認しようと封を切る。

「きやつ！－

悲鳴にも似た声が部屋に響く。

「どうした？」

俺はすぐに駆け寄る。彼女の手にした封筒の中には黒い髪の毛がばさっと入っていた。

「なんなのこれ～」

彼女は、怖い物を見たように言った。

俺は、消印を確認する。

昨日投函され、消印は近くの町の名前になっていた。

「脅迫か？それとも、ただの悪ふざけか？」

彼女は、まだふるえている。俺は、少し心の奥で思った。こんなにも彼女を怖がらせるやつは、許さないと。

翌日、またあの封筒が来た。

投函は昨日、そして中には金色の髪が入っている。

消印は、大阪となっていて。この近くから離れている。

しかし、俺はそのことで近くに犯人が潜んでいることを知った。

わざと遠く方に視線を反らし、足下に犯人がいると言つことは良くある。

俺は、彼女が危険にさらされていることを覚つた。

「夜牙、狙われているかもしれないから気を付けろよ。みるよ。」

俺は、そつと声を掛ける。

「うん、分かった。」

彼女は、にっこりと笑った。

僕は、どんどん髪を刈つていきます。

今思うとここら辺では、良い髪を持った人が少なすぎると思います。  
だけど僕は刈りを続けます。

さあ、もう5日ぐらいが立ちました。

いま、なかなかしつぽを出さないDASに少しだけ戸惑っています  
が、

まだまだ時間があるので嬉しくなります。

クラスの女子の半分以上がショートカットになつていった。

俺は、この異常事態に彼女を守ることしかできぬいでいた。  
なんて卑怯な俺なんだ。他のやつを助けられないなんて。

ショートカットの女子達に話を聞くと犯人の目星がついてきた。

犯人は、小柄。

しかし力は強く、顔は覆面で隠していて不明。

服装は、どこかで見たことのあるような制服で手には良く切れるナイフを握っている。

狙われた女子のほぼ大半は、元々はロングだったようだ。

犯人は、ロングの女子高生を狙う髪大好き人間らしい。

しかし疑問に思うのがそんな髪大好き人間が俺たちの所になぜ大切な髪を送つてくるのか。

・・・・・・・ 分かつた。

俺は、ある一つの説を立てた。

これは、夜牙に関係のある事件だということを。

僕は、早く彼女に会いたいです。

無能な探偵研究会なんて不需要です。

僕は、彼女の髪にただもう一度触れたいのです。

俺は、夜牙を呼び出した。

「夜牙、遅かつたな。この犯人の見当は付いた。」

「それは、誰なの？」

彼女は、不安に辺りを見回すが俺以外には誰もいない。

「君が知っている人物さ。」

「で、それは誰なの？」

「甘いな。これは挑戦状なんだ、君に対しての。だから君が解かなくてはだめなんだ。」

「ヒントは？」

「分かつた少しだけだぞ。」

俺は、夜牙にヒントを与える。彼女がこれで感付けば彼女の髪は無くならなくなる。

いざとなつた時は俺が出なくてはならないかも知れないが。

「分かつた。」彼女は、すたすたと歩き始めた。

俺の出したヒント①は、消印。

今までに7通の郵便が来ているが、そのどれもが違う消印になつてゐる。

ここまでいうと分かるだろうが・・・

犯人は、わざと腕をしている。

そして次にその消印の押された場所。

一番最初は、俺たち地元のやつしか分からない小さな町だが  
2番目からは、大阪、千葉、東京、神奈川、などといった都会のしかもとも有名な町で押されている。

とこうじとは、犯人はこここの近くで刈りをしていふところだ。

彼女の後について歩く。

彼女の目的地は分かつていた。

ヒント2は、髪の毛。

普通、クラスの半数が短期間にショートカットになった時点でおかしいと思う。

そして、送られてきた髪は全てで7通。

何か矛盾している。クラスの女子半分は、10人だ。

残りの3人の髪はどこに行つたのだろう。

この3人は、とても綺麗な髪の持ち主だったと夜牙からは聞いている。

さあ、どう思つだらうか、髪フェチの犯人の行動とは。

私は、犯人の見当が付いていた。

水途からのヒントのおかげだと思つた。

ヒントは3つ、最後のヒントが確信の種となつた。

そして今、私は犯人の自宅へと向かつてゐる。

最後のヒントは、私の髪を1回でも触つたことのあるやつ。

そう、私の髪は中学以来誰にも触られなかつた。

中学の時触つた、涼風が犯人だと覺つた。

もつすぐ僕の元に彼女は、来るでしょ。

僕は少しでも部屋を綺麗にしようと努力しましたがカーペットに髪が沢山散らばつてすごいことになつています。

あれだけのヒントを『えれば彼女は、僕にたどり着いてくれると思います。

僕は、そっとソファーに座りナイフを綺麗に拭きます。

もうすぐあの忌々しい、彼の家に着く頃だ。

私はなんだか悲しかった。

けれど足を止めようとは、思わなかつた。

後ろにいる水途は誰かに電話を掛けている。たぶん警察のおじさんだと思つ。

彼の家の玄関に立つ。

『ピーンポーン』玄関のチャイムを鳴らす。彼は、逃げないだろうと私は分かつていて。彼は、私のこの黒髪を狙っているのだから。

玄関のチャイムが鳴ります。

僕は、彼女が来たことが分かりました。

すぐにソファーから降りて迎えに行きます。

「いらっしゃい。」

「お邪魔します。」

彼女は堅苦しく僕の家に入ります。

私は、彼の家に入る。水途は少し不安そうに私を見送つた。水途と約束を交わした。もし私の髪が無事に帰つてこなくても水途のせいじゃないと。

そして、私は上がり込んだ。

俺は、彼女一人で行かすのは不安だつたが警察が到着するまでの時  
間稼ぎとして行かせた。

本当は、そんな事をさせたく無かつたけど彼女は、にっこりと笑つ  
ていつてしまつた。

警察は、3分ほどで来ると行つていた。

「山鹿久しぶりだね。」彼はにっこりと笑つてゐる。

「うん、久しぶりだね、涼風。」

「ところで高校は楽しい？」

「うん、そつちは？」

「たのしいよ。」

彼は、まだ微笑している。

「山鹿の髪はいつ見ても綺麗だね。ちょっと触つても良いかい？」

私は頷く。

「なんで、そんなに髪の毛が好きなの？」

「ん？僕は、髪の毛が好きなんじや無くつて。山鹿の髪が好きなん  
だよ。」

私は、中学の思い出を思いだす。

イジメは耐えてきた、だけど涼風のせいでもつといジメにあつたの  
は完全に否定できない。

【や～い、山鹿男子に髪触られてやんの。キモーイ。おまえの髪は  
地獄の髪～】

なんだか、よく解らない言葉が聞こえてきた。

「やっぱ君の髪は良いね。」

「じゃあ、私の髪をあげる代わりにもうこんな事を止めてくれるか

な？」

「そんな事は、できないよ。髪は気持ちいいんだよ。」

そう言って、彼はポケットから束になつた髪を取り出す。

「なんで、私の髪が好きなんじゃあなかった？」

「好きだけど、好きだけど。僕は、我慢できないんだ。誰かの髪を触つていないと。」

彼は頬に髪の束を撫でつける。

少し見ていると彼はナイフを取り出した。

「今さっき君の髪をくれるつていったね。」

「うん、だけどこの事件を止めてくれるんだつたら。」

「分かった。じゃあ、いただきます。」

そう言って彼は、私の髪を刈り取つた。

彼なりに我慢したのだろう、私の髪の3分の1ぐらいまでしか切らなかつた。

「なんで、もっと他の人みたいにばっさり切らないの？」

彼は少し笑つていた。

「他人？僕7人ぐらいしか切つてないよ。しかも2分の1ぐらいしか。」

不思議に思つた。じゃあ残りの3人わ？

「ねえ、涼風はなんで髪が好きなの？」

「ううん、何でだろうな？ただ、色の付いている髪はあまり好きじゃないのは確かだ。」

「そりなんだ。」

私の中にあつた恐怖感はなくなりつつあつた。

「ねえ、そろそろ帰つても良いかな？」

「うん、今日はありがとうな。この髪。俺、もう人の髪とか切つたりしないから。」

彼は、笑顔でそう言つていた。

私は玄関を出る。

じゃあな。

その後、涼風は警察につかまつた。

けれど抵抗はしなかった。彼は私の髪を握ったまま連行されていった。

私は、なんだか悪いことをしたような気がしたが水道はそのことをいうと首を振った。

もし、彼が私に髪をぐださいと言つてくれればこんな事にはならなかつたのにと後悔した。

そして私は髪の毛を短く切つたのだった。

俺は、夜牙が髪を短くしたのに驚いた。

もう少し長い髪が良かつたのにと少し悩んだ。

だけど、彼女は前よりも素直に笑うようになった。

それが、この事件での彼女の収穫となっていたのは確実だった。

俺は、彼女がどんどん成長していくことを少し不安に思いだしていた。

そして夕日に染まる教室で、

この残された3人の髪はどこに行つたのかと考え出していた・・・

## 7話 Hair&Hunt（後書き）

第7話目でした。人が死ぬ話が多い中、唯一このお話は人が死にません。しかし、クラスの被害者残りの3人は、なぜショートカットになってしまったのでしょうか？そしてなぜこの高校だけの事件だつたのでしょうか？その謎は次話に書いていきたいです。

「なあ、去年はしなくて今年はしたいって言つことが有るか？」  
水途は唐突に聞く。

「う？」私は、考える。

今年、高校生として最後の年。何かしたい事したい事。。。

- 1、お正月の新年会！！（家族とだけど。）
  - 2、先出し年賀状。（もう遅いけど。）
  - 3、じゃあ、後出し年賀状。（確實に叶いそう。）
- どれも、一般的な家族構成つて感じのやり残しな～。

「ない。水途は何がしたい？」

私も聞き返す。

「俺もないって言えば無いんだけどな。。。

気になつてている事が一つある。正月になる前にやりたい事。。。

「それはなに？」

私は水途のやりたい事の興味がわいた。

「ん？この前の涼風の事件があつただろ。それがどうも引っかかるつていてな。

その再調査がしたいんだ。」

「うん、良いよ。別にお正月までは暇だし。」

そして、私たちはあの事件の再調査に出かける事にした。

私は首筋が寒いので少し風邪気味だが、

私たちの学校が季節はずれの

ショートカットブームになつているのはあの事件のせいだった。

私が、中学生の時初めて私の髪を触った男子がいた。

その涼風という男子がまた私の髪を狙つて起こした事件だった。

彼は、7日間私たちDASに封筒に入つた髪を送ってきた。

消印は、別々のところで押していた。

しかし、狩りをしたのはこここの近くだけだったといつ事だった。

私たちの学校からも被害者が出た。

どの人も髪が長く整っている人だつた。

しかし、今警察で取り調べを受けている涼風はそのことを否定していた。

共犯もいる訳ではなく、ただの単独犯だつたのだが・・・

私たちは、心の隅をつつかれた感じになつた。

涼風が捕まつたあとも私たちの学校のショートカット率は、増えていつた。

ここまで来るとどうもおかしいという事で警察も動いているようだが、私たちも調査をしようと思つたのであつた。

しかし、その調査と来るとなかなか進まないたちの悪い物だつた。聞き込みは私たちのクラスの女子全員に聞いた。

しかし、結果は私たちの負け。

ほぼ、全員の人が班員の顔や背丈を知らずに髪を切られたと言つていた。

そして、そんなことを繰り返してこるうちに町で見かける人もショートカットが多くなつていつた。

私たちは、せつぱ詰まつていた。

そして私はある提案をした。

「ねえ、おとり捜査をしてみようよ。」

と、自分でも訳のわからないドラマかぶれの一言をばく。

「うへんどうした物だ。手詰まりという物は俺たちにとつて最悪だからな。」

水途は、別の手を頑張つて考へているらしく一向に顔を上げないでいた。

「おとり捜査はなるべく避けたい。よし、親父に電話してみるか。」

そう言つて水途は携帯電話を取り出した。

「もしもし、俺だけぞ。」

「おお水途か・・・どうした。」

「今、手詰まりなんだが・・・そのあの例の事件にな。」

「ひつちもや。おまえ、また事件に顔つっこんで抜けなくなつてもしらねーぞ。」

そう言つて親父は、電話を切つた。

今回は、俺の気迫負けと言つことか・・・

しかし、ややこしい物になつてしまつた。

犯人が見つからぬ異常に苦しいことはない。

背丈は解つている。

しかし人相が掴めない。

覆面を被り、黒の服を着ているという情報しか掴めていない。  
ああ、こんな時どうすれば・・・。

水途は悩んでいる様子だった。

「ねえ、水途。年越しは、どうするの?」

「うん? いつもは、一人で年越しそばを食つていてる。」

「じゃあ、今年はうちに来ない?」

私は、年越しを水途と一緒に過ごしたいと前から思つていた。

「良いのか? 俺なんかを家に連れ込んで?」

そして私たちは、年末を過ごすことになった。

家族の反応わといふとなんでもなによつてのほほんとしている。

ホントにもう。

姉は、まだ傷が痛むよつて手首を押される。

けれど、それは私への嫌がらせとして熟知していた。

ホントに姉は脳天氣で良いよね、今私は解けない氷を前にしているんだから。

どういう訳か、今回の事件は水途の元気を奪つていった。そして、それを見ている私も落ち込んでくる。

あの謎が解けないまま除夜の鐘を聞いている今・・・  
どこから花火の音も聞こえている。

『ドン！－』

花火や、除夜の鐘に負けないまがまがしい音がどこからともなく響いてきた。

その音は私たちの事件に発展を持たせる音だった。

深夜、13時を少し過ぎた頃、だから警察の乗るパトカーの音が聞こえてくる。

僕は、すぐさまもつていた拳銃をしまい、車に乗り込んだ。

少し返り血を浴びていたが何とか服にはかからなかつたのでほつとする。

目の前にあつた遺体の中から抜いた髪の束を少し持つて行く。こいつがこんな物を作らなかつたらと怒りがわいてきた。

ふと靴の裏に何かがついていたのでそれを触る。

それは血と毛の塊だつた。

車がゆっくりと出発する。

僕は心を落ち着かせるためにそつとその場を立ち去つた。

私たちがあの音を突き止めるために警察の集まつている場所に行つた。

まだ、高校生の私たちは中に入れてもうないけれど現場は少しのぞけた。

少し薄暗い森の近くの住宅街のはずれが事件現場だった。

被害者は射殺され無惨な姿になつてているということだつた。

辺りには髪の毛を束にした物が散らばつており最近起こつていた連続かみ切り事件の犯人が殺害されたと言うことに為つた。凶器は、拳銃でかなり至近距離で撃たれているため、犯人が返り血を浴びているという可能性で調査をしていくようだつた。

私は、水途に聞いた。

「この事件どう思つ?」

すると彼はこう答えた。

「まだ全体は見えないが、

被害者はあのかみ切り魔にして間違ひはないだらう。」「どうしてそう思うの?」

「それは、よく見てみな。まず、被害者は拳銃で何回も打たれている。

しかし被害者のポケットにつまつてゐる髪には血が付いているがリュックの中の髪にはついていない。

これがどういう事が解るか?」

「うへん? ?」

「解らないか。答えは簡単さ。この被害者がかみ切り魔で髪が好きでリュックやポケットに入れて持ち歩いていた。

そのことを知つた犯人は被害者を殺した後ポケットにあつた新しい髪の束を手にして立ち去つた。

私は、そこまで聞いてもよくわからなかつた。

「しかし、犯人は自分もしくは恋人の髪を搜してゐた。そこでポケットの中を探り髪を探し出した。

返り血を浴びた手でポケットを探したためポケットの中になつた

髪は血まみれになつた。

ということだ。」

「解つた。で、犯人は女？男？」

私は、変な質問をしてしまつた。

「うん・・・それが問題だ。女かもしれないし、男かもしれない。  
しかし拳銃を至近距離から撃てるのはどちらかといえば魅力のある女かもしれないな。

拳銃は、重いと思うんだが・・・そこはどうなるのだろう。」

また彼が考え始めた。

私は、見守ることしかできないでいた。

「よし、これはよい展開だぞ・・・解つた。」

水途は独り言を言つていた。

「何々！？」

「この犯行の犯人は二人組だ。男女ペアのグループ。

女の方が犯人を撃つた。そして近づいて行つたのが男だ。なぜか  
解るか？」

「わかんない・・・」

「ここが重要だ。犯人と男は友人だつた。しかも犯人が毛を刈つて  
いると知つていた友人。

しかし友人はそれを知つていたが黙つていた。

しかし、友人の彼女のボニー・テールがいつの間にかショートカッ  
トになつていた。

さあ、ここまで言つたら解るだろう。」

私は考えてみた。

もしこの事件の犯人水途の説明では友人だがその彼女の髪がショー  
トカットになつていたら・・・

「解つた、それに腹を立てた友人が彼女と共に謀して犯人を殺した。」

「そう、それだとこの事件のつじつまが合う・・・。」

俺は、そのことで少し警察と話していくが夜牙も来るか？」

「ううん、いい・・・行かないもう少し犯人の心情を考えてたい。」

そう言うと水途はすたすたと歩いていった。私は、少し考えてみる。  
なぜ、犯人は彼女の髪を切られただけでかみ切り魔を殺そうとした  
のだろう。

どうしてそうしたのだろう。

そして私は一つ思いつく。

水途が帰ってきたのでわたしは考えたことを話す。

「ねえ、水途私思つたんだけど・・

犯人の動機つて彼女の髪を切られただけじゃないんだと思うな。  
たぶん犯人は、かみ切り魔の行動を規制したかったんだろうな。  
私なら犯人と知っている友人がいたら止めさせるけど・・・」  
そこまで言つた私は口をつぐんだ。

そして水途の見解を聞く。

「そうかもしれないな。しかし、俺ならそこまでしないぞ。  
警察に話すとか他に手はあるだろ?」

だから俺は悩んでるんだ。」

水途もこんな事件は初めてだつたようでものすごく悩んでいた。  
そして私たちは家に帰つた。

なんだか普通の年末が普通じゃなくなつてしまつた。

僕は靴の裏に付いた血をぬぐつた。

だいぶ乾いていたので俺はそれをじりじり落とす。

やつぱり血は汚い。

髪の毛が混ざつた靴の裏はもの凄いことになつていた。

明日は、学校なので少し自分の格好を確認する。

まだ、手の血をぬぐつていなかつた。

しかしそれを彼女に言つことも出来ずに血の臭いにむつとしながら  
車に揺られていた。

翌日の朝刊に大きな見出しで連続髪切り事件容疑者死亡「で書類送検」とでていた。

私は結局の所犯人の心理が掴めずに夜を明かしてしまった。死亡した犯人は中年の男性だ。

そう言えば、私達の学校にも同じ位の年の先生が居たような。まあ、関係ないか。

俺は死亡した犯人の職業や出身を調べたが、これといった証拠めいた物がなく落ち込んだ。

どうして今までなんなりと事件が解決していったのか不思議に思うくらいだ。

朝刊に昨夜の事件が載つていたが、まだ、誰も俺には気付いていないらしい。俺は罪いや善良な事をした。  
そう思っている。

アレほどまでに騒がれていた髪切り魔の影が日が経つにつれて薄くなっていく。俺はその事に不安を感じていた。

学校へ行くともう、髪切り魔の事を気にしなくなつた女子がワイワイと騒いだりしている。

何とも情けない事である。夜牙にも、笑顔が戻つたが、事件の未解決が不安なのか、時々空を見上げて考え込んでいた。

私は髪切り魔を殺した犯人の心理が気になっていた。どうして、殺したのか。

なぜ、射殺したのか。気になる事が沢山ある。

水途は私の考えを見透しているような目で見詰めてくるからこっちが恥ずかしくなる。犯人は誰でなぜ髪切り魔を・・・

俺はあいつを殺した事を後悔していない。神経が狂っていると言わ  
れてもかまわない。

ただ、後悔だけはしていない。彼女は自分の切られた髪をゴミ箱へ投げた。

俺はそれが許せなくて、気付いたら彼女の首を閉めていた。  
ぐつたりした彼女は白眼を向き、今にも事切れそうな青白い顔をしていた。

息を吹き返した彼女は俺はを見るなり顔をひきつらせて不気味に笑つていた。

俺はゴミ箱に入った髪の束を引き出しに入れておく。まるで宝物だ  
など自分でも思う。

あつと言う間に、髪切り魔の存在は姿を消していった。俺は戸惑つ  
ていた。

どうすれば髪切り魔を殺した犯人を捕まえられるのだろうか。今日  
の放課後、夜牙と話し合うことにした。

私は、犯人の心理が掴めないでいた。どうすれば髪切り魔の心理と

犯人の心理を捕まえる事ができるのだろうか。

今朝、学校へ行くと、騒ぎが薄くなっていた。俺は、間違つていなかつたのだと思った。

平和になった町が辺りには広がり職員室の雰囲気も和やかな物になつていた。

俺が殺した鉄は実にいい奴だつた。

しかし、奴はある時から狂いだした。あの連續髪切り魔のニュースを見てからだつた。

部屋には白、黒様々な種類の毛や羽根が散らばつていた。

その中には人の毛まであつた。鉄はあらゆる毛に対して執着心をいだいていたのだと俺は思う。

そして鉄は髪切り魔を模倣して行動し始めた。

俺はそれを見ていたがいつの間にか俺まで狂いだした。

髪に対しての執着が鉄の影響によつてか強くなつていた。

そして綺麗な髪の女性と付き合いだしたのだがその髪は鉄によつて奪われた。

俺は鉄を憎んだとして殺した。

しかし、その事実を他人に知られてはいけない。

俺は公務員としての業務を果たしていれば問題のない職員だ。

誰にも覚られないようにそつと書類をまとめる。

私は有る可能性をはじき出した。

もし犯人や髪切り魔が髪に執着心をいだいていたら。  
そしてもし精神状態が狂つていたら。

そう思うと可能性が出てきたように思えた。

私はD A S の部室がある棟に歩いていく。

俺は犯人が使った拳銃について考えていた。

日本で使われている拳銃で主に警察が使っているようだったが、特に紛失届などは出ていない。

それでは犯人はどうやって拳銃を手に入れたのだろうか。日本では売買されているはずがないと親父は言っていた。

D A S の部室のドアを会えると水途が何かを考えながら夕日に染まつたテーブルをじっと眺めていた。

私は入るなりソファーに腰掛けそうそうに話し始めた。

「水途、私の推測を聞いてくれる？」

「別にかまわない。」

「じゃあ、始めるね。まず、犯人の心理についてなんだけど。犯人は今後悔をしていない。」

「どうしてかはまたあとで聞こう。それで？」

「犯人は水途の言ったとおり男女ペアで共犯と思つた方が辻褄が合うの。」

「うん」

「で、髪切り魔を殺したのが男の方。」

「じゃあ、女の方は、何をしたんだ？」

「それは、殺しを犯した男の足となつて車を運転した。かみ切り魔との接触はなかつたと言つことなの。」

「ふむ。」

「そして凶器の話しなんだけど。拳銃は警察しか使われていない。」

「そうだ。まあ、密輸でもすれば別だが・・・」

水途は適度に合図地を打つてくれる。

「で、髪切り魔と犯人は友人関係にあつた。」

「そう考えられる。」

「そう。ここまで考えて、私思つたの。犯人は男性、しかも一般の人。

そして髪切り魔を殺したのもこの人。けどその凶器となつた拳銃は女性が持つていたの。」

「なるほど、女性は警察官か。」

「そう、それだと一致するの。」

「ところで気になつたんだが、なぜ彼女はかみ切り魔や自分の彼氏を警察に引き渡さなかつた？」

「それは彼女の立場に問題があつたんじゃあないかしら。」

「たとえば？」

「う～んつと、彼氏のことも好きだつたけど実は髪切り魔のことも好きだつた。」

「要するに一股か・・・」

「たぶん。」

「そうか。ありがとな夜牙、推理しやすくなつたよ。」

しかし、水途は結局推理しなくて良い状況に陥つてしまつた。

なぜかはもう解つた人もいるかも知れないが、警察の調査の結果。

検察官 佐藤 優那が捕まつたからである。

なぜ捕まつたのかというと、彼女が所有していた拳銃から弾丸が一つなくなつていたことと、血痕が見つかつたからである。  
彼女は自白し始めている。

そして捕まつたのは私達の学校の先生である優眞 英であった。

この事件は急展開によつて幕を閉じた。

私の推理ははずれていたのかも知れないがまた、この学校から犯人が出てしまつたのには悲しくなる。

俺は、悔しかつた。

この事件は、俺を呼んでいたのに解決に結びつけられなかつたこと。  
後悔が波に乗つてきたように俺をおぼれさせている。  
もう少し早く気付けばと沸々とわいてくる後悔が俺を落ち込ませて  
いる。

「みーずーと！」

明るく話しかけてくる夜牙の声でさえ、重みを感じさせた。

「今度頑張ればいいんだよ！」

肩をたたかれた俺は少し顔を上げた。

そつと唇が何かに触れた。

彼女が顔を真っ赤にしていた。

「頑張ろうね。」

一瞬だけ赤く見えた顔がにつこりと笑つた。

俺も頑張らないといけないとつくづく痛感した。

遅くなつてすみませんでした。いよいよ話もできあがりました。  
さて落ち込んだ水途に降りかかる不幸。  
夜牙に襲いかかる最大の敵とはー(次回予告です。)

## 9話 Have A Dreamily Dream

春が近付いてきた、始業式の日。山鹿夜牙は悩んでいた。

この3年年間海神水途と共に、たくさんの事件を解決してきたのか、

ここ最近の水途はどうも落ち込みがちであるのだ。

水途は頭が良くなりて、賢い。

なのに、自分の存在をどこか心の奥で憎んでいたような気さえしてしまつ。

そんな水途を見ていると悲しくなつて来るのだった。

同好会として、活動しているD A Sももうすぐ、3年目を迎えるようとしていた。

暖かな日差しが空から降り注ぎ、辺りはほんのりと暖かな陽気となつていて。

夜牙は元々、ものを考えるのがあまり好きではなかつた。

しかし、この3年間で、良くものを考えるように成つていた。

水途は悩んでいた。

自分の力が目に見えて減少して行つたからである。

爽やかな風が窓の縁を触つしていく。

その瞬間に水途の髪もなびく。

「はあ。俺はビックリしたのだわ！」

水途は歩きだす。

ある日、夜牙に宛先もない手紙が送られてきた。

「山鹿夜牙様。」

その手紙はそれで始まつたいた。

「お元気でしようか。

お体は壊されていませんか・・・

まだ、夕焼けは綺麗ですか？

そしてあなたは綺麗ですか？

この前の年末は大活躍で良かつたですね！

それとも悔しいですか？

自分の不甲斐なさに・・・

生活は、充実していますか？

水途くんとは仲良くやっていますか？

そして、今何で泣いているんですか？

あの傷は今でも残つていますか？

僕の付けた傷・・・

僕の証し。」

この一文で分は終わつていた。

「近いうちに会いに行きます。」

私は、鳥肌を抑えながらふるえていた。

昔心の奥底にしまつた思い出を無理矢理

誰かに引きずり出された気がした。

俺は何気なく窓の外を眺めていた。

夕日に染まるうとしているその海は、何とも言えない色になつていた。

久しぶりにDASの部室を訪れた。

何も変わつていない部室に夜牙が座つていた。

「どうした？」

顔が真つ青になつた夜牙を見て不安になつた。

「何でも……ない」

そう彼女は言つた。けれどその田は俺に何かを伝えようとしていた。

「何があつたんだ。」

しかし、彼女はうつむいたまま話さうとはしなかつた。ただ、その時の瞳が忘れられないぐらい印象的だった。

帰宅した俺に一本の電話がかかってきた。

「・・・・はい、もしもし。」

「海神水くんですか。」

「はい、そうですが・・・」

「至急、市立病院に来てください。」

「なぜですか?」

「来たら解ります。」

その声は焦りもなくただ淡々と俺を誘っていた。

俺は背筋に寒気を感じて家を飛び出した。

市立病院は走つて10分もかからない距離に立つていた。俺がそこに付くと親父が立つていた。

「親父、何があつたんだ。」

「・・・・・」

親父は断固して無言である。

「なあ。」

俺は不安に追いやられて動搖していた。

「・・・・水途、良く聞くんだ。」

親父は俺の田を見てゆっくりと話しお出した。

「・・・・山鹿夜牙くんが・・・」

まず出てきた名前にビックリした。

「夜牙がどうしたんだ!!」

俺の不安はどんどんと深まっていく。

「・・・自殺しようとした・・・」

「…」

親父の言葉に笑いが込み上げてくる。

「はつはつは・・・親父何言つてるんだよ。

冗談だろ。下手な冗談はやめろよ・・・

夜牙が自殺なんてあり得ないだろ・・・・

俺がそう言つている間も親父は首を振り続けている。

「何でなんだよ…！」

俺は叫ぶ。

「そんなことないつて言えよ。」

親父は首をまだ振る。

「夜牙が・・・夜牙がそんな事するばずねえだろ…！」

「水途・・・現状を受け止めるんだ。

まだ、彼女は死んでいないんだぞ。」

「ほんとか…！」

俺は動搖しつばなしだったその心を落ち着かせた。

「じゃあ何所にいるんだ？」

「病室だよ。だが、まだ会うことが出来ない・・・

集中治療室に入っているからな。」

俺の不安がまた同様に変わつていった。

「どうして・・・そんなことを…・・・

「それを調べるのはお前の仕事だろ。」

親父はそう言つて俺の背中を押すように車へ乗せた。

俺は、冷静になつて夜牙の行動を振り返つてみた。

そう言えば今日の放課後、夜牙が顔を真っ青にしていた。

何か嫌なことがあつたような・・・

そんな表情だつた。

もしかしたら何か悩んでいたのかも知れない。

しかし、それに気づけなかつた俺は自分の不甲斐なさに腹が立つ。

『夜牙。本当に何が夜牙を追いつめたんだ！』

夜牙が自分から命を絶とうとすることはないはずだ。

『なあ、夜牙何でなんだ。』

ピンポーン。

チャイムが鳴つた、私はそつとドア・スコープをのぞく。あの手紙の送り主が来たと思つたがそこに女性配業者のお兄さんが立つていた。

「はい、」

「お届け物です。はんこをお願いします。」

「これでいいですか・・・」

「はい結構です。ありがとうございました。」

私の手の中には私宛の小さな小包が残されていた。  
送り主は父からだつたが父が小包を送るとは思はないので不思議に思つ。

誰だろうこんないたずらをするのは・・・  
だけど開けないわけにはいかなかつた。

ビリビリ。

ガムテープをばがし中をそつとのぞく。  
中には沢山の写真と、無くしたと思っていた大切にしていたモノ  
そして一通の手紙が入れられていた。

「山鹿夜牙様」

「お元気ですか。これで2回目の手紙です。  
僕のことちゃんと思いだしてくれましたか？  
もう、近くまで来ました。」

あなたの通つている学校を見ました。

明るくて僕とはまるで違つ生徒達ばかりでしたよ。  
水途くんは僕のように暗くないようですね。

先日水途くんを見ましたよ。

彼の瞳は澄んでいました、

君の瞳とは全然違いましたよ。

あの怯えた瞳、僕だけの瞳。

早く会いたい。

同封した写真は君と僕の思い出。  
彼とは決着を付けさせてもらひます。

あいつの声が聞こえた気がした。

もう何年と聞いてないあの嫌な声。

ごく普通な毎日を送ってきたはずの、私に降りかかった数少ない災難の一つ。

あの最悪な出来事が私の脳を浸食していった。

夜牙の部屋に入った俺は沢山の写真がベッドの上に散らばっているのを見た。

普段の生活ではあまり写真を見ない方だが  
この枚数は異常だと思った。

数百枚と表現しても良いような沢山の写真  
その一枚一枚が夜牙を撮った物だった。

小さい頃のモノと思われる可愛い女の子の写真、  
体操服でピースをしている写真、

そして、ショートカットになつた現在の夜牙の写真もあった。

「誰がこんな事を・・・」

つい独り言が漏れてしまう。

沢山の写真の下からは、

かわいらしい花柄のボールペンやハンカチ、

くまのキー ホルダー、鏡など大切にしそうなモノが沢山埋まっていた。

「これも夜牙が大切にしていたモノなのか・・・」

またもや独り言が口から無意識に漏れ出す。

手紙のような紙切れが写真の下からでてきた。

そこにかかれていた内容は俺の予想を超えたモノだった。

夜牙の姉に以前聞いたことがあった。

夜牙の腹部には大きな傷跡が残されていると言つこと。

それを付けた奴は夜牙の小学生の頃の同級生で、

今では少年院から解放され普通の高校生として生活していると言うこと。

夜牙は、腹部に負った傷と共に心にも深い闇をおつたこと。

しかし、その闇をビンに押し詰め心の奥に封印しているのだという。そしてそのビンを無理矢理に開けたのがこの小包を送つてきた奴だと思った。

しかし、送り主は夜牙の父親の名前になつている。

「さてこれからどうした物か・・・」

夜牙に事情を聞くことさえ出来ない不利な条件だ。けれど夜牙が首を自ら吊つたとは思えない。

「そうか！現場へ行こう。」

山元 静は普通のクラスメイトだった。

目立つこともなければ特に悪いというわけでもなくただ、普通に学校へ来ては放課後になると気付かない間に帰つているそんなクラスメイトだった。

私は大して山元には興味を注いでいたわけでもなく一言も話したことのない間柄だったことは言うまでもない。

しかし、山元は良く私の前に現れては一々カリと笑つて去つていった。

当時の私にはよく解らなかつた。

しかし、山元のうわさ話を良く耳にするようになつてから私の興味は山元の物となつた。

よくよく考えてみれば噂という物は大して信憑性のない物だつたと思う。

“ 山元くん家のお母さんお父さんに殴られているんだつて。そんなたわいもない噂。

それを私は信じてしまつた。

まだ小学生だつた私は薄い知識だけで行動に移していく。  
そんな時山元が笑つて私の前に近づいてきた物だから  
ついついその噂の話しを本人に直接聞いてしまつた。

山元はにっこりと笑つたまま話していくがある言葉を聞くと顔つきが変わるのだつた。

“ 死”

そう、この言葉が山元を狂わせていたのかも知れない。  
そして今の私も苦しめているのかも知れない。  
人には絶対的に死が付きまとう。  
しかし、死がないと生もない。

そんな簡単なことださえ小学生だつた私と山元は解つていなかつた。

俺は夜牙が自殺いや、殺され掛けた現場にいた。

「 ここだな。」

薄暗い何かの物置のような場所だつた。

誰かに発見されたのが奇跡的だろうと思つ。

山田運送が所持している倉庫らしい。

“「コツッ コツン」

足音が辺りに響く。

「夜牙何でなんだ。」

そんな独り言がついつい漏れてしまつ。

鉄骨にくくり付けられたロープが揺れていた。

「現場の保存状況は良いみたいだな。」

踏み台にしたと思われる椅子も倒れたままにしてあつた。

「椅子? なんで倉庫なんかに椅子が?」

疑問は絶えなかつた。

夜牙は鍵を内側からかけ、自殺を図つたようだ。

しかし、そうなると始めに夜牙を発見した人はどうやって中に入つたのかということだ。

鍵を持つていれば簡単かもしれない。

しかし、夜牙は内側に付いているはずのない鍵を掛けたのだろうか。鍵を持つていれば簡単かもしれない。

自殺をする奴がどうやって内側から外側の鍵を掛けたのだろうか。答えは簡単である。

夜牙を殺そうと考えた奴が首吊りに見せかける為にやつたとしか思えない。

椅子もそのために運んできたのであるつ。

俺は一つの仮定にたどり着いた。

夜牙が大切にしていたもの。

そして小さい頃からの写真。密室と見せかけた殺人未遂。

小学校の頃の闇。

腹部の傷。

そして一本にわざと繋がりを持たせた犯人。

そう。

これは俺に対する挑戦状だ。

夜牙待つてろよ、お前を殺しかけた犯人を懲らしめてやる。

## 9話 Have A Dreamily Dream(後書き)

第9話になりました。  
ここまで長かつたと思います。  
そして次回が区切りの10話  
さて、もう解つているとは思いますが・・・  
水途と、夜牙を殺そうとした犯人との最後の決戦があります。  
次話もお楽しみに！

10話 The world where you are not (前書き)

そして静かなる  
水途の戦いが始まる

静かな夜が過ぎていき

俺の中の推理が、形になつた。

夜牙を追いつめたあいつを今度は俺が追いつめる。

こう決心を決めて俺は家を出た。

夜牙の部屋にあつた写真にはどれもある男が写っていた  
そいつは小学時代おとなしいと評判だつたらしげが  
俺にとつては憎むべき男である。

あいつが残した手がかりは一本につながつていた。  
まず、

夜牙の腹部のけが、  
夜牙のお姉さんに聞いてみると

小学生の時ケンカを止めようとして怪我したらしい。  
小学生のケンカで怪我するのはと思つたが

お姉さんの話によると

山元 静やまとと しづかという親から虐待を受けていた少年があり、  
その子の異常な“死”に対する怯えで、  
クラスメイトの「冗談」がカッターナイフを持ち出したケンカになつた  
らしい

そしてそれを止めようとした夜牙に被害が及んだ。

その後、夜牙には山元に対する恐怖心がこびり付いたのだといつことだつた。

いきなりの手紙や、小包に夜牙は冷静さを失い、

俺にも相談なしに山田運送に行つたらしい。

過去のトラウマもあつたらしい。

そして自殺に見せかけた俺への挑戦状。

密室に見せかけた倉庫は、作られた密室で

よくよく考えてみれば、外側からしか鍵はかけられない。

そう、こんな抜けた挑戦状なんかを叩き付けてくるやつは夜牙を奪う力すらない。

俺は山田運送に向かつていた。

もう夕日が街を照らす時間になつていた。

山田運送に倉庫を見せてくれるよう頼むと快く若い男性が案内してくれた。

「ここです」

「ところで」

目の前にいる男性に俺はほほえみかけた

「なんですか？」

「あなたが山元さんですね？」

「そうですが？」

「鍵もあなたが管理し、夜牙の発見もあなたの仕組んだことなのだろう？」

山元はこいつりと頭に来るぐらいの笑みを浮かべていた。

「夜牙を殺さなかつたのは俺と勝負するためで、夜牙を手に入れるためだ。」

俺の推理は正しい、山元の顔は何がおかしいのかどんどんと歪んでいく。

「そうだよ。夜牙は俺の物だった。

君、海神 水途君が現れるまではね。

夜牙は君と出会って、俺を忘れていった。

そして君に漬かっていった。

「

一息ついてまた二タ付く山元に怒りが沸いていく。

「だけど俺は君に負けたくないかった。

そう、勝負したくなつたんだ。」

倉庫の中は静まりかえり俺の目に鈍く光る鋭い牙が見えた。

「俺を殺しても、夜牙が悲しむだけだ。

しかし、殺したいのであれば殺すがいい。」

俺の決心は歪まなかつた。

何も言わない山元はただ、静に笑つていた。

「さあ、俺が殺されることで夜牙が幸せになるのであれば殺せ。それとも、死にたくないという気持ちが強いのか？」

その光る刃で何人刺して、何人の死をしてきたんだ？」

俺はあえて山元がおそれている“死”というキーワードを口に出す。笑っていた山元の顔がどんどんと曇つていき、ついには瞳から涙があふれ出していた。

「親は死んだ、俺がおそれる物なんてない！」

そう叫んだ山元は俺に刃を向けた。

刃の先はかすかに震えていた。

「まつて！」

どこからか声が聞こえた

「夜牙！――

振り返ると倉庫の入り口に夜牙がいた。

「何でおまえがいるんだ！！」

混乱したように山元は叫んでいた。

大きくナイフが揺れたので、俺はそのナイフを握っている手を掴んだ

地面に叩き付けると簡単にナイフは解かれ、地面に落ちた。

【カチ】っと高い音が静だつた倉庫に響いた。

「あなたに水途は殺せない、」

夜牙は一步また一步と近づき、

武器を失つた山元は一步また一步と倉庫の奥に下がつていった。

「来るな！くるな！」

小学生のように泣き叫ぶ山元を夜牙は追いつめていった。

夜牙は俺に近づいて怪我のないのを確認したら、

ほっとため息をついた。

夜牙の首には青い痣が残されていた。

「警察に全部話したから」

ニッとした夜牙は悲しそうな瞳を山元に向かってた。

「静は、私の友達だったの。

だけど親に虐待されてて“死”という言葉を聞くとおかしくなつちやうんだ。

あの日も、そうだった

たまたま工作の授業でカッターナイフを使ってたの

そしたらクラスメイトの子が私たちをバカにしてきたの。

そして“死”ねばいいのについて、カッターを私に向かってきた。

夜牙は苦痛に耐えるような顔をして続けた。

山元は脅えていた。

「その時、静が私を助けてくれたの。

やめろって…だけどそれが、クラスメイトを逆上させてしまったの。

ナイフはゆっくりと私に振り下ろされたのを覚えてるんだ。

けど、静がクラスメイトをかばつて私を刺したことにしてしまったの」

夜牙は涙を流していた。

「ごめんね、静。私があなたを狂わしてしまったんだ…」

俺は夜牙の言動を見ているしかなかつた。

山元はうれしそうに笑つて倉庫から走り出でてしまった。

その時、俺の耳にはこう聞こえた。

「夜牙、ありがとう

俺は夜牙を泣かしてしまつた悪い子だよ。

さよなら…・・・

その言葉が俺の心に響いた。

「水途、巻き込んでごめんね」

「いや、」

俺は笑つた。

夜牙も笑っていた。

「警察に話したのは嘘なんだ。」

「解つている」

暖かな春が過ぎ、夏を告げる蝉が鳴き出した。

もうすぐ長い3年の残り半年を切りつつとしている。

あの図書館で

事件ファイルを探つていた彼女を見て

もう2年と半年が過ぎてしまった。

身の回りではあり得ない数の事件がまだまだ起こつてている。  
教室の窓から外を見るとまた、パートカーがライトを光らせる。  
その中で俺は夜牙と生活していた。

「ねえ、水途」

「ん?」

につっこりと笑つた夜牙に変わったなと言つ感覺が生まれた。

「なんでもない」

夜牙の頭をさすつてみると  
うれしそうにほほえんだ。

## 10話 The world where you are not (後書き)

れて・・・

10話です。

だいぶ遅くなつてしまつた更新も区切りをつけるように動き出しました。この話ではまれにしか見ない、暖かな優しさを追求してみました。

次話も是非お読みください。

あつとこづ間に半年が過ぎ去つた。

この3年間、俺たちは過去の柵を取り払い  
そして急激な成長を告げた。

夜牙も、暖かく笑うようになり  
俺は未来を見るようになった。

「水途！」

D A S の部室には山積みの資料がいつの間にか図書室へと返却され  
ていた。

「なんだ？」

「何でも・・・」

そう言おうとした夜牙にシッと手を当てる。

【ガサガサ】

段ボールが置かれた部屋の隅から音がした  
段ボールをのけると白と黒の斑点の猫がいた。  
頭の隅を記憶が駆け抜けた。

「かわいい

猫を拾い上げて撫でる夜牙を見ると、俺の忘れかけていた頭痛が蘇  
つた。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない

「ホントに？」

「ああ。」

「嘘だね」

にっこりと笑つた夜牙は俺の額を突ついた  
「嘘付いてるの解るよ」

「実は、」

俺は昔あつたことをすべて話した。

好きだつた黒と白の斑点模様の犬の事・・・

その、死と腐敗

どれもが俺の暗闇となつていつたこと

夜牙は相づちを打ちながら

話を聞いてくれた。

「そうだつたんだ。

だけど、水途はそれをおそれなくていいんだよ

だつて、私を大事にしてくれた。

私を助けてくれた。だから過去のことは断ち切つていいの」

「その猫を貸して」

「うん」

夜牙から受け取つた猫を抱いてみると  
暖かくいのちを感じた。

「生きているんだね。」

「そう、私たちも、その猫も

みんな生きているの・・・」この3年私たちは死を目にしてきた。

だから解るのいのちの尊さ。

だから水途も人を傷つけなくなつた。

私も姉をおそれなくなつた。

それが私たちの出会いから生まれた

なれの果て・・・

私は良かつたと思つ。水途と出会いえて

「ああ。」

暖かな感覚を腕の中に抱いた俺はそれをゆっくりとソファーにおり  
した。

「もうすぐここにもこれなくなるね」  
夜牙が目に焼き付けるように見回した。

「楽しかった、怖かつたけど・・・

卯月先生どうしたのかな・・・」

懐かしい言葉に夜牙への愛しみが蘇る。

「ありがとう、何度も助けてくれて。

私、水途を信じてたんだ」

ほほえむ夜牙と別れたくない。

そんな気持ちが沸々と沸いた。

「なあ、夜牙。」

「なに?」

「始めは興味本位だつた。

同類の人間だと思っていたんだ

だけど、少しずつ愛おしくなってきたんだ。

誕生日はうれしかったよ

本当に甘かった。」

「うん」

顔を赤らめた夜牙をぎゅっと抱きしめた。

「自殺を図つたと聞いたときは悲しみで言動がおかしくなった。

山元が憎くなつた。

俺は、夜牙に漬かつていつたのかもしれない」  
腕の中に夜牙の暖かさを感じ、鼓動を感じる。

「もうすぐ、俺たちは卒業する

「うん」

「俺は夜牙と別れたくない。」

夜牙は瞳から美しい涙を流していた。

「なあ。気持ちを聞かせてくれ」

「私は...好き。」

水途と離れたくない」

暖かな光の中で

未来を見る2人がいた。

そして終わりを告げるチャイムが学校内を包んだ。

話 And , it ends with the start . (後書き)

ついに終わりを告げてしまいました。

始めはどうなるかと思っていたこの話も、

なぜか暖かなお話に・・・

最終的に黒くないと言われても。

私は文句ありません

最後までお読みいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1341d/>

Attempt Suicide

2010年11月10日03時10分発行